侃斯達篤

一

919-2

F
カー102

甲子歳初秋新雕

井信良譯　初帙

侃斯達篤内科書

江都醫學所諸先生著篇製本俱全凡四方君子賜雲顧者須認每部印章方是正本發兌書肆江左老皂館主人謹白

慶應義塾大学医学情報センター 昭和41年 月12日

富士川文庫
2810

~~2冊~~
493.1
Ka-1
1
No.1591
19-2

序

原本係日耳曼（ドイツ）大學校醫局都講兼諸學科社頭罕（カン）斯達篤（スタット）氏所撰、別林（ベルリン）醫官邊阿孤（ヘンオコ）氏、增補訂正改刷及第三回者、而荷蘭點設翁（ステセアウ）氏、翻以邦語、彼紀元一千八百五十七年鏤行、題曰原病治法各論者也、每病門揭症候、原因、鑑別、預後、及治法之要、更附解剖症候顯微鏡所驗、與舍密法撿查、博採諸家之說、證以自固之驗、一病一症、係分縷折、而議論通暢、事理精確、實可謂闡幽發微者矣、抑西洋各國、名哲輩出、殫精焦神、凡宇宙間之事物、遡源尋理、非窮其奧不

止者既尚矣、於是乎博物舍密之學、日新於一日、原生原病之術、大改舊典、隨醫方亦一變者不尠矣、若本編者、則近今醫方書中之純乎純、為當以足窺其真面目之一斑者、看官如脱舊套別開一新眼熟讀此書、則當臨病施治之際、得措置有法、去痼驅癒、猶響之應聲歟、是所以余先譯此編公世也、雖然日新之學、豈謂偏信此一書以為足乎、又若彼運垤里弗氏、費爾肖氏、諸家之書等、將俟他日以問世矣、

元治元年三月江戸醫學局教授越州醫員坪井良
信良識

凡例

一原本卷帙廣博、之ヲ譯スルニ、全編卒業ノ如キハ、歲月ヲ積ニ非サレハ能ハス、今編首ヨリ次序ヲ逐ヒ、隨テ譯シ、隨テ剞劂氏ニ附ス、是レ新近ノ論說ヲ、速カニ濟世ノ士ニ頒タント欲スルノ微意ノミ、故ニ前後或ハ譯例ヲ異ニスル者アラン、看官幸ニ之ヲ恕セヨ、

一編中時刻ヲ記スルニ、時、分、秒ノ字ヲ用フ、一時ハ、彼ノ一ユールニシテ、我春秋分平等時ノ半時、一分ハ、一時ヲ六十分スル者、一秒ハ一分ヲ六

十分スル者ナリ、

一秤量「ゲレイン」「スクルペル」「オンス」ハ、先輩所製ノ字ヲ襲用シテ、氏、刃、写ト記ス、「ダラクマ」ハ、戔ト譯ス、是レ写ト写ト謬誤アランヿヲ恐レテナリ、「ポンド」ハ、斤ト譯ス、便ニ依ルノミ、

一病名、物名、藥名、皆先哲ノ所定ニ随フ、但シ未詳ノ者ハ、姑ク原名ヲ記シ、以テ識者ノ考按ヲ俟ツ、

元治甲子三月

坪井良信良識

侃斯達篤初編目次

巻之一
補給機諸病第一
其一　血液製造諸病
多血
乏血
萎黄病
巻之二
其二　血液循環諸病
血液欝積

焮衝其一
卷之三
焮衝其二
卷之四
出血
遺傳出血
卷之五
水腫
其三　滋養增減諸病
滋養過多
卷之六
滋養乏少（勞瘵　疳勞）
風氣腫
脂肪腫
病性成形（善性腫瘍　悪性腫瘍）
卷之七
腺病
卷之八
結石
軟解

硬結
寄生

侃斯達篤全編總目次

補給機諸病第一
其一血液製造諸病（多血、乏血之類）
其二血液循環諸病（鬱積、焮衝之類）
其三滋養增減諸病（肥滿、瘦削之類）
神經機諸病第二
熱病
神經病
定類毒諸病第三
其一發疹病（痘瘡、麻疹、羅斯之類）
其二卑濕病（間歇熱、古列刺、痢病之類）

其三神經聖京傴熱
其四雺氣病（感冒、僂麻質之類）
其五動物病（狂犬病之類）
（附中毒山物毒、植物毒）
其六傳染病（黴毒、癩病之類）
其七敗血病（失苟兒陪苦、痛風、痔疾之類）

各部病第四

其一頭腦病
其二脊髓病
其三神經病
其四氣道病
其五血道病
其六消食器病
其七利尿器病
其八男子陰部病
其九婦人陰部病
其十腹部病
其十一皮膚病

侃斯達篤全編總目次終

侃斯達篤巻之一

越州　坪井良信良譯

補給機諸病第一

其一　血液製造諸病

多血

多血トハ、血液ノ量、増多スルノ總稱ナリ、多血ハ固ヨリ疑ヲ容ルヘキニ非サレトモ、各人ノ血液調和ヲ精密ニ知ルヿ能ハサレハ、臆斷ニ過サルノミ、アンドラル氏及ヒガハルレト氏曰ク、血體ノ

量増加スル者ニテ、古人ノ稱スルカ如ク、纖維質ノ増加スルニハ非スト、其血暗色、水液大ニ色ヲ帶ヒ、血餅大ニシテ頗ル硬ク、多量ノ血水ヲ含ミ、眞ノ豚肉皮ヲ結バス、

症候

多血ハ眞ノ疾病ニ非ス、唯疾病ノ素因タルノミ、其人全然健康、營養旺盛、諸機活潑、總身病ム所ナシ、唯血液ノ分配不均ナルヿアルカ、或ハ古人稱スル所ノ局部多血トナリ、一部一系ニ於テ、血液輻進スルヿアルニ及テ、始テ疾病トナルナリ、未タ此ノ如クナラス、單ニ多血ナルノミナレハ、全身肥豐、脈管機能旺盛、脈實大ニシテ力アリ、皮膚ノ脈管膨脹シ、皮膚赤色、溫度增進、筋力强盛ナリ、但シ之ニ兼テ動性諸機怠慢シ、精神爽快ナラス、嗜眠倦惰スル者屢之アリ、血液分配不均ナルニ及テハ、生活機能ノ諸患ヲ發ス、而シテ多血トナルノ部、各〻異ナルカ故ニ、局部症ヲ發スルモ、亦數般ノ別アリ、是レ各部篇ニ於テ詳説スヘシ、抑モ多血症ヲ發シ易キノ部ハ、之ヲ他部ニ比スレハ、血液富饒ナルカ故ニ、固ヨリ多血部ト稱スル所ナ

リ、例之肺、心、腦、肝、脾是ナリ、此諸部ハ、多血トナレハ、疾病ヲ發シ易シ、殊ニ其部機能亢起スル𪜌ニ於テ然リ、則チ成童ノ年齡、冬時ハ肺病ヲ發シ、壯年ノ人、又炎熱ノ時令ニハ、肝病ヲ發スルカ如シ、

多血ト、血液沸騰トヲ混スルヿ勿レ、多血ハ持久ノ景況ニテ、血液沸騰ハ一時偶發ノ症ナリ、真ノ多血ハ、血液沸騰ヲ兼ル者多シ、之ニ由テ局部多血ヲ發シ、血液輻進、出血、焮衝、發熱スルアリ、血液沸騰ハ、血液輻進シ、一時ノ多血ヲ發ス、則チ夏日炎天ニ農業スル者、强テ進歩スルノ軍勢、强烈ノ飲液ヲ用フル時ノ如シ、其真ノ多血ト異ナル所以ハ、其發スル所ノ景況ト脈大ナレ𪜈軟ニシテ無力トナリ、真ノ多血症ハ、脈强ニシテ力アリ、

多血ハ、高貴ノ人逸居美食スル者ニ於テ之アリ、其人身體肥滿スレ𪜈、彈力少ナク、諸機强實ナラス、唯外貌ノミ、其肌肉脂肪多ク、軟ニシテ强固ナラス、皮表ノ脈管深ク皮下ニ沈ム、真ノ多血ニテハ、脈管皮上ニ隆起シ、太キ紐ノ如シ、甲症ニ於テ、多量ノ血ヲ放出スレハ、脈管忽チ萎

縮ス、又一種假性多血ナル者アリ、肥胖ノ婦人是ナリ、是レ水分多キヲ以テ、血量増多スルノミ、而メ血體ハ却テ減少スルナリ、

肥滿ノ人却テ血少ナシ、スキユルツ氏曰ク、肥滿ノ牛ヨリハ、却テ痩削ノ牛ハ、二十斤、三十斤以上ノ血アリ、ハレンテン氏曰ク、肥滿セル人ハ、痩削ナル人ヨリハ細脈管中ニ多血ナリ、

原因

少壯ノ年齒、婦人、體質多血、北方ノ地ニハ、多血ヲ發シ易シ、其素因ハ、多クハ遺傳ニメ、同化製血ノ機盛ニ、其人勉テ補給營養ノ機能ヲ減損セントスレ𪜈能ハス、血液ヲ製造スルヿ盛ナル者ナリ、此ノ如ク補給機ノ增進スルハ、食餌膏粱、體動不給、運動少ナク、睡眠過多ナルニ由ル、又尋常習僻タルノ排泄、月經、痔血ノ閉止、刺絡ノ怠期、四肢ノ截斷、大脈管緊縛、汤乙狀排泄液ヲ速カニ吸收スル等、皆以テ多血症ヲ發スルナリ、然レ𪜈必シモ上ノ諸症ヲ發スルハ、全身多血ナルニ非ス、血液運行急疾、各部血液欝積スルハ、是レ局部多血ナルナリ、

局部多血、或ハ有形性障害ニ由ル者アリ、則チ體格畸異ニシテ、血液分配平均ナラス是レ佝僂ノ人盂骨ト胸骨トノ間隔狹窄、由テ血液ノ循環平均十全ナルヲ得ス、四肢ノ畸形、亦同因ヲナスナリ、抑モ多血ナレハ、疾病ノ素因トナリテ、焮衝、出血、滋養過多ヲ發シ易シ、

治法

多血ナルノミニテ、未タ疾病ヲ起サヽルノ間ハ、固ヨリ直チニ之ヲ治スヘキノ法ナシ、唯攝生ヲ節度ニシ、補給ヲシテ費耗ニ超越セサラシメ、適宜ノ食餌、動物ヲ少ナクシテ、植物ヲ多カラシメ、水ヲ多飲シテ、血液ヲ稀薄ニシ、排泄ヲ増多ナラシム、〔此法實ニ多血ノ後害ヲ預防スルニ足ル、〕運動ヲ多クシ、長眠及ヒ逸居ヲ禁ス、

血液分配平均ナラサルニ由テ、健康ヲ害スルニ至レハ、刺絡ヲ必須緊要法トス、固ヨリ局部瀉血ノ能ク代ルヘキニ非ス、兼テ誘導法、下劑、消焮治法ヲ施コスヘシ、但シ多血ノ性真假辨シ能ハサル者ニハ、妄リニ刺絡スルヿ勿レ、夫レ一時血液沸騰、夏日ニ發スル者ノ如キニ於テ、誤テ刺絡ス

レハ、其害却テ少カラス、是レスクミユケル氏ノ歴驗スル所ナリ、滴浴法、頭部冷水洗法ハ、妄リニ刺絡ヲ施コメ、死地ニ陥ラシムヘキノ患者ヲ救フニ足ル疑似ノ際ニ於テハ、試ニ少量ノ刺絡ヲ施コシ、或ハ局部瀉血ヲ以テ、其功害ヲ測リ、更ニ血液ヲ漏泄スヘキヤ、將タ之ヲ貯フヘキヤヲ決スヘシ、

乏血及萎黄病

乏血トハ、血液乏少ナルヲ云フ、

血液乏少ト、血液減損トハ、自ラ別アリ、血液減損ハ、一時ノ發症ナルノミ、血液乏少ハ、持久スルノ景況ナリ、

血液乏少、或ハ一部、一器ニ於テスルアリ、又全身皆然ルヿアリ、

全身諸部顯ニ血液乏少ナルアリ、所謂乏血、又汎乙減少スルニ非スメ、血中ノ必要ナル成分、血體、纎維質、乏少ナル者アリ、此症ノ兆候、真ノ乏血ト

相似タル者、之ヲ血液稀薄、又血液無力ト稱スヘシ、抑モ血液ノ分量減少スルヿアレハ、必ス其性質ヲモ變スヘキヿ、自ラ知ルヘシ、固ヨリ相分テ考フヘキ者ニ非ス、真ノ乏血、即チ全身血液ノ量減少スルハ、必ス、血中各種ノ成分、兼テ減少スル者ニテ、多量ノ失血後ニハ必ス發スル所ナリ、則チ直チニ血體減少シテ、汾乙液過多トナリ、脈管流動液ヲ吸收スルヿ增多スルカ故ニ、必ス大渇ヲ發シ、之ニ由テ全身血液ノ量ハ、却テ失血前ヨリハ增多スルヿアリ、

此時患者滲淡衰脱スレ𪜈、脈動奮起シ、動脈ノ鼓動顯著ニメ、血液ノ脈管ヲ運行スルノ音聽クヘシ、是レ大失血後ノ減血ニハ無キ所ナリ、故ニレートス氏ハ、乏血ヲ治スルニ、水液排泄ヲ催進スルノ法（發汗藥、利尿藥、通利藥、）ヲ主張スルナリ、

萎黄病ハ之ニ屬スヘキ一種ノ乏血ナリ、但シ其原因尚未タ詳カニセス、世醫通稱スル所ノ萎黄病ハ、少女天癸將ニ至ラントスルニ方テ發スル所ノ慢性乏血病ナリ、但シ皮膚ノ萎黄スルハ、他

ノ疾病ニ於テモ發スル所ナレハ、ハレンチ子ル氏ノ説ニ随テ説クヲ當レリトス、則チ一種ノ乏血病ニテ、顯著ナル原因アルニ非ス〆、血體減少スル者ナリ、

血液撿査　諸乏血症ニ見ル所ノ兆候、萎黄病ニ於テ之ヲ見ル、必見ノ症ハ、血體減少スルカ故ニ、漏泄スル所ノ血ノ異重、又血灰中ノ鐵分、共ニ少シ、又必ス血水ノ量増多シ、鹽分、卵白質、纖維質、皆比例ヲ失シテ少ナシ、是レ但シ必見ノ症ナラサルカ故ニ、或ハ平全ノ量ヲ保持スルアリ、或ハ減少スル者アリ、静脈ヨリ漏ス所ノ水様血液、速カニ凝固スルモ、其血餅小ニ〆、表面鮮紅色ナリ、多クハ帯緑黄ニ〆、極テ稀薄ナル血水ニテ之ヲ圍包ス、血餅上ニ豚肉皮ヲ結フ、

コルチリアニ氏曰ク、豚肉皮ヲ結フハ、其燃衝性ニ傾ク者ニ於テノミ然リト、但シ他氏ノ驗スル所之ニ異ナリ、夫レ豚肉皮ハ、即チ血體減少スルノ兆ナリ、故ニ血餅ノ上部ハ無色ナリ、是レ決シテ消燃法ヲ施コスヘキ者ニ非ス、ハンノヘル氏曰ク、萎黄病ノ婦人ハ、炭酸ヲ呼出

スル丁大ニ平全ノ人ヨリハ多シ、但シ單純ノ乏血ノ人ハ、炭酸ヲ呼出スル丁少ナシ、試ニ獸類ニ於テ、頻回刺絡シ、以テ之ヲ證スヘシ、則チ湯乙增多シ、血餅小トナリ、卵白、纖維質、鹽分、血體減少ス、マルサルル、ハルル氏、及ハ、ナスセ氏曰ク、多量ニ瀉血スルノ後ハ、湯乙中ニ脂肪多ク存スト、是レ脂肪ヲ吸收スル丁多キニ由ル者ナルヘシ、

解剖症候

乏血ノ部ハ、其色滲淡、乾燥、無血、之ヲ截リ、之ヲ押シ、之ヲ裂クモ、一滴ノ血ヲモ漏サス、周圍減小シ萎縮シ、或ハ全然軟解ス

全身乏血ノ者ハ、死後心ノ右房、大動脈、大靜脈、毛樣管網ニモ、血液極テ少ナシ、血液ノ凝結スル者モ、小ニシテ軟、心藏軟脆、全身諸部殊ニ腦、肺、肝、腎、及ヒ諸筋滲淡稍乾燥ス、而シテ牢實ナラス、膜狀組織ハ、滲淡、平滑、腸ノ內面ニハ、夥シク粘液ヲ寖敷ス、但シ脾、腦膜ノ如キハ、甚シキ乏血ニ於テモ、全ク血虛トナル丁ナク却テ血液鬱積スル丁アリ、

ロキタンスケー氏解剖書中ニ記ス曰ク、其人

固有ノ體質ニテ、殊ニ婦人心藏狭窄、動脈成育十分ナラス、隨テ乏血ノ者アリト

症候

乏血症候、急性、慢性ノ別アリ、

一急性乏血

卒然トメ多量ノ血液ヲ失スレハ、忽チ大ニ衰脱シ、動性諸機機能ヲ失シ、麻痺、癱瘓、五神其用ヲ廢シ、耳鳴昏冒、卒仆、精神昏迷、腦髓麻痺等ノ症ヲ發ス、肺藏麻痺シテ呼吸絶シ、全身氷冷、活色ヲ失シ絶脈シテ頓カニ死スルアリ、大人ハ失血ヲ堪フルヿ小兒ヨリハ易ク、婦人ハ男子ヨリハ易シ、

乏血ニ由テ發スル所ノ症ハ、一種ノ者ニシテ、其部ノ抵抗運營ニ起ル者ナリ、故ニ多血若クハ能ノ刺衝ニ由ル所ノ症ト同シ之ニ由テ譫妄、耳鳴、羞明、眼火散爛痙攣等ハ、頭腦ノ乏血ヨリ發ス、又努力ノ後、久ク起立スルニ由テ、此等ノ症ヲ發スルヿアリ、但シ患者ヲ平臥セシムレハ、即テ治スヘシ、今夫レ失血シテ衰弱セル獸類ノ前脚ヲ揭ケ舉レハ、忽チ昏冒ス、又後脚ヲ舉上スレハ、直チニ之ヲ復スヘシ、故ニ失血

ノ患者ハ、其體ヲ高クシ、頭部ヲ低クシ、血液ヲ腦ニ輻進セシムヘシ、然ルニ多量ノ出血ニテ死セル人ノ屍ヲ解觀スルニ、出血ニテ死セル獸類ノ如ク、腦及ヒ腦膜ハ、他部ニ比スルニ、血液欝積スル者アリ、此理ハ後ニ詳説スヘシ、

二 慢性之血萎黄病

下ニ記載スル諸般ノ證候ニ由テ之ヲ知ル、

其一、血液ノ症候、外部皮膚、粘液膜、眼ノ白膜、乳頭唇、舌、歯齦、頬ノ内側、蒼白色ニ〆蠟ノ如ク、小便、經血、色ヲ失シ、温度減少、屢憎寒戰慄シ、全身顯シク厥冷ス、

患者身體若クハ精神ニ感動スルヿアレハ、顔色蒼白ノ者、兩頬忽チ紅ヲ潮ス、又少女、萎黄病ニ罹ル者、醫者診察ノ際、眼ノ白膜急ニ赤色ヲ發シ、意思ノ感動ニ由テ、復タ忽チ其色消スルヿアリ、以テ神經機能ハ、細脈管ノ血行ニ大ニ關係スル者タルヲ證スルニ足ル、

其二、神經諸症、

全身脱力、少許ノ運動ニテモ、忽チ倦怠、疲勞シ、精神沈欝シテ、静默ヲ好ミ、故ナクシテ歎息啼泣シ、

或ハ死ヲ求メテ止ス、好テ睡眠シ、動作ニ懶ク、或ハ後頭ノ定所ニ於テ、劇痛ヲ發シ、又諸部神經痛ヲ發ス、殊ニ胃、心頸、面部、肋間神經ニ於テス、又或ハ搐掣、子宮病ヲ發スルアリ、

其三、血液循環諸症、

少許ノ運動ニテモ、心悸動ヲ發シ、心動響アリ、少許ノ情意感動アルモ、心動鞴音ヲ發シ、心藏、大脈管共ニ響アリ、脈動數小、震蕩、軟虚、又或ハ脈大ニ震搖スル者アリ、是レ動脈凝收力ヲ失スルニ由ル、〔ヘルレー氏〕或ハ脈大强ニシテ醫若シ全身ノ景況ヲ參考セサレハ、誤リ認テ心藏病トナシ、或ハ焮衝ナリトスルヿアリ、

血液乏少ナル者ニ於テ、發スルノ數脈ハ、須ク注意シテ之ヲ鑒別スヘシ、消耗諸病ニ續發スル者ナルヤ、將タ哺乳過久ナルニ由ル者ナルヤ、但シ必シモ瞀留スル熱ノ有無ヲ以テ辨スヘキニ非ス、

其四、呼吸機諸症、

患者氣息絶止シ易ク、咳嗽シ易シ、殊ニ階ヲ上リ、疾行スルノ後、又動脈血ヲ費ヤス所以、肺、心ヲ動

揺スル所以ノ諸件アレハ皆然リ、此時直チニ平臥シテ静息セサレハ、忽チ眩暈、昏倒ス、

其五、消化機諸症、

食欲缺乏、或ハ異嗜、好テ土質、酸性諸物、加爾基、泥土類、炭、鹽、醋、未熟ノ菓實、酷烈ナル香料ヲ求メ、消化失宜、心窩ニ於テ壓迫、膨満、疼痛ヲ患ヒ、

凡ソ此患者、患フル所ノ胃痛、常ニ必ス神經性ナリト思フヿ勿レ、宜ク詳カニ胃部ヲ診察シ、精細ニ内外諸因ヲ探ルヘシ、萎黄病ノ處女、胃ノ粘液膜ニ慢性ノ焮衝、腫瘍ヲ生シ、外貌神經痛ノ如クニソ、卒然トメ胃穿開トナリ、頓カニ死ニ陥ル者少ナカラス、故ニ極テ精密ニ鑑定スヘシ、

咽喉灼クカ如ク、呑酸、嘈雜、酸液ヲ吐出シ、風氣雷鳴、便秘、或ハ下利ト交發ス、

其六、諸排泄、尿量減少、其色澄清、異重減シ、微酸臭アリ、ベキユエレル氏試驗スルヿアリ曰ク、萎黄病者ノ尿ハ、尿素、尿酸減少シ、而メ不燃性ノ鹽分多シト、

其七、營養、肌肉弛緩シ、稀ニハ痩削ス、成育ノ期

ニ方テ、發成ノ機進マス、皮膚及ヒ毛髮、乾燥糙澁ス、

其八、陰部、經行順調ナラス、或ハ過多、或ハ過少、或ハ忽チ來リ、復タ忽チ止ム、其血白濁水ノ如ク、布片ヲ汚セハ、斑痕ヲ遺ス、但シ乾燥スレハ、其色褪散ス、此等ノ諸症、必シモ萎黄病ヲ決スルニ要ナシ、萎黄病ニ〆經行順調、或ハ更ニ過多ニシテ常ニ異ナラサルアリ、但シ必ス白帯下狀ノ汚液ヲ漏シ、浸淫シテ陰部ニ輕ミノ小腫瘍ヲ生ス、然レ𪜈陰部ヲ檢査シ、局處治法ヲ施コスヿハ、多クハ患者耻テ秘スルカ故ニ、能ハサル所ナリ、

脱血ト、乏血トヲ鑒別スルノ症候中、最要ナル者ハ、頸部脈管ノ音ヲ聽取スル是ナリ、則チ聽管ヲ用ヒテ試ルニ、二樣ノ音アリ、甲ハ樂器ヲ吹クカ如ク、乙ハ連續ノ音ナリ、甲ハ實ニ動脈ニ起ル者ナリ、故ニ心室ノ收縮ト相應シ、又今撿スル所ノ部下ノ頸動脈ヲ强壓スレハ、則チ止ムナリ、心藏又大動脈ノ諸患、皆此音ヲ發シ、又健康ノ人ニ於テモ、心藏ノ機能亢盛シ、兼テ頸部ノ諸筋牽張スルキニモ然リ、又更ニ聽管ニ

テ直チニ大動脈ヲ壓迫スルニ由テモ然リ、故ニ脱血、乏血ヲ鑒別スルノ確兆ニハ非サレ𪜈、乏血ニハ必ス頸部ノ脈管顯シク强音ヲ發スルナリ、乙音ハ連續シテ噴泉ノ如シ、是レボウイルラウト氏首唱スル所ノ「ノン子ン音ナリ（ノン子ン」ハ小兒翫弄物ノ名、之ヲ鳴ラシ游戯スルナリ、）亦心藏ノ收縮スルトキニ、其音强トナルカ故ニ、同シク動脈ニ起ル者ト云フヘシ、血液相摩軋シ、動脈內面ニ衝撞スルニ由ル、キユイス氏曰ク、動脈ヲ壓迫スルモ、之ヲ聽クヘシト、ポッペ氏、及アラン氏首

ニ此音ノ靜脈ニ出ルノ說ヲ唱フ、此音ハ咽喉ノ靜血脈管兩端ノ中間、殊ニ右側ニ於テ聽クヘシ、若シ人咽喉靜脈ノ血行ヲ、聽管ノ上部ニテ壓シテ支フレハ其音止ム、但シ指ヲ放テハ復タ音ヲ發ス、起立スルトキ、又吸氣ノ時ハ、其音强シ、然レ𪜈强ク呼息スレハ止ム、是レ血液咽喉靜脈ニ廻流スレハナリ、又身體ノ位置ヲ變シ、頭ヲ低レ、胸ヲ高クシ、咽喉靜脈內ノ血行ヲ遲徐ナラシムレハ、其音ヲ聽カス、スコダ氏其音弱キ者ハ、强ク吸氣スレハ、明亮トナル、然レ

ヒ深息スルトキニ氣管ニ發スルノ音ト、靜脈ニ起ルノ音トヲ混スルヿ勿レ、故ニウヱベル氏深息ノ時、指頭ニテ靜脈ヲ壓シ、又之ヲ放チ、以テ深息ノミノ音ト、靜脈ノ音ト合スル者トヲ、聽分ツノ法ヲ定ム、患者大ニ瘦削スルカ、水腫ヲ病ム者ニハ、靜脈音止ムヲ常トス、

大靜脈充盈セス、血液ノ運行容易ニシテ、疾速ナルハ、則チ此音ヲ發スルノ本原ナリ、故ニ凡ソ血量減少、血質水分ヲ含ムヿ多キ諸病ニ於テ聽クヘク、萎黄病、及ヒ敗血諸病皆然リ、抑モ此音萎黄病ニ發スル者最モ多シト雖、未タ以テ確然鑒別ノ證トナシ難シ、健康無事ノ人ニテ全然少シモ乏血ノ症ナキ者ニモ、之ヲ聽クヿアルハ疑ナキ所ナリ、ゴリユプ氏舍密法試驗ニ據テ曰ク、靜脈音アル人ノ血ト、健全ノ血トヲ比校スルニ、少異アルヿナシト、

原因

乏血ヲ發スルノ原因、三樣ノ別アリ、一 血液ヲ費用スルヿ過多ナル者、二 血液製造ヲ妨ケ、或ハ之ヲ多カラサラシムル者、三 各部ノ血行ヲ妨ケ、一

局部ニ於テ凝固スル者、

其一　血液ヲ費用スルヿ極テ多ク、遂ニ全身ノ血液ヲ減少スルニ至ル、然ル所以ハ、過急ノ成育、多量ニメ卒然ニ發スル失血、又少量ニメ頻回發シ來ル失血、殊ニ身體努力ヲ兼ル者、下劑、刺絡ヲ過用シテ、血液ヲ失スル者、過久ノ哺乳、流涎、多量ノ膿液漏泄、下利、粘液漏泄、脱汗、經行過多、過房、運動過多、妊孕頻回、贅肉發成ナリ、急性病愈後、殊ニ食餌禁忌嚴ニ失スレハ、久シク此症ヲ遺スナリ、

其二　血液製造ヲ妨クル所以ハ、凡ソ血液製造同化及排泄ニ必須ナル要部ノ諸患、消化失宜、腸、肝、脾、肺、心、腎、大脈管、乳糜脈、腸間膜諸患、食餌不給、硬固ニメ消化シ難キ物ヲ連用スル、殊ニ兼テ體動過多、空氣汚穢、坑夫多ク乏血ヲ病ムハ之カ爲ナリ、就中石炭坑内ノ硫水素氣、炭酸多キ氣、又濕潤ナル陰谷、及間歇熱地方病タルノ地ニハ、之ヲ病ム者多シ、鑛屬鉛、銅、水銀、砒石、ノ蒸氣ヲ含ムノ氣ハ、大ニ血質ヲ損ス、是レ坑夫ニ此病多キ所以ナリ、酸性ノ植物毒ニ中テ死セル獸類ハ、血液減少ス、又酸素不給ノ氣、光素缺乏ハ、共ニ血液製造

ヲ害スル者ナリ、

エトワルヅ氏曰ク、暗所ニテ養フノ獸類ハ、諸部能ク肥胖スレ𪜈、唯白色ノ液増多スルニ由ルノミ、又牢内ニ在リ、常ニ昏暗ノ洞穴ニ居テ、少シモ日光ニ觸レサレハ、幽囚二三日ニメ、面色忽チ蒼淡トナルヿ、猶乏血ノ人ノ如シ、脈動一分時間、八十動、九十動ニ至ル、而メ他患アルヿナシ、

洞穴ニ居住スル、少女天癸始テ至ル、神經機能ヲ抑壓スル事件、悲哀、過慮等、皆乏血ノ因トナル、

實驗ニ據ルニ、慾情ノ發動ハ、萎黄病ヲ發スルノ最大因ナリ、但シ然ル所以ノ理ハ、未タ之ヲ詳カニセス、或ハ曰ク、其機能ヲ妨クルニ由ルト、或ハ曰ク、婦人ノ鋭敏ナル機能ヲ妄リニ刺戟シ、夙ニ慾情ヲ煽動シ、其意ヲ遂ケス、戀情慰スル所ナク、手淫、獨悦、稗史ヲ讀ミ、春畫ヲ看ル等ニ由ルト、然レ𪜈、此等ニ關係セサル者、亦少ナカラス、其最モ關係スルハ、坐業ト、公工局、裁縫肆等ノ汚穢ノ氣是ナリ、此類ノ所ニハ、衆人群集シテ、空氣ハ汚穢トナル、是ニ於テ縫女此

病ニ羅ル者多シ、又市井ニ多ク、田舎ニ少ナク、北地ニ多ク、南地ニ少キ、亦以テ知ルヘシ、又女兒ノ夙ニ狹窄ナル衣ヲ服スル、一因ト云ヘシ、春時ト秋末ニハ、此病多キヿ、冬日夏日ヨリ甚タシ、而〆病院ニ入ル者、亦此時ヲ多シトス、抑モ近世此病ノ増多スルヿハ、官吏ノ知ル所ナリ、

但シ萎黄病ハ、天癸始テ至ルノ少女ニノミ發スルニ非ス、小兒又妊婦モ之ニ罹ルヿアリ、妊婦ノ血液、殊ニ妊孕第五月以往ニ於テハ、血體減少シ、隨テ鐵分少シ、ベキエレル氏及ロジール氏曰ク、健康人ノ血ハ、千分中、鐵零五四一分アリ、妊婦ノ血ニハ、零四四九分ノミ、世醫多クハ妊婦ニ發スル諸症ヲ多血ニ由ル者ト〆、治ヲ處ス、然レ𪜈水様多血ニ〆、真ノ多血ニ非ス、故ニカレアウキス氏ハ、總テ肉類、及消化シ易キ品ヲ與ヘテ、血液ノ脈管中ニ衝撞スルヲ鎮静スルニ、少量ノ瀉血ヲ行フヿアルモ、極テ少ナリ、老年ノ婦人、又男子モ之ヲ患フルヿアリ、而〆其諸症ハ、少女ニ發スル萎黄病ト異ナル

ヿナシ、又夫レ神經機能ノ敏捷ナルハ、血液ノ良全ナルニ由ルカ如ク、血液ノ良全ナルハ、神經機能ニ關渉スルナリ、故ニ萎黄病ノ原、或ハ血液ニ在リ、或ハ神經ニ在リ、醫宜ク之ヲ察スヘシ、

其三　局部ノ血行ヲ妨クル所以、或ハ器械性因ニ由ル、壓迫、動脈消滅、閉塞、愈着等是ナリ、又一種枯槹機ニ由ル乏血アリ、是レ一部ニ於テ血液鬱積シ、他部ニハ減少スル者ナリ、婦人經行中、顏面、唇色滲淡、眼圍青暈ヲ發スルアリ、或ハ偏頭痛等ノ症ヲ發ス、是レ血液ノ分配、全身平等ナラス、腦中乏血ナルニ由ルナリ、一部多血ナレハ、他部乏血トナル、又其症少量ノ失血ト符合セサルカ如キアリ、血液分配ハ、枯槹機ヲ以テ說クヘキノミ、少許ノ䶊血、咳血、咯血等ニ於テ、脈小、面色滲淡、眩暈、昏倒スルアリ、又外表ノ部、血液減少シテ、腸、腦膜等ニ於テ甚シキ多血症ヲ發スルヿアリ、

經過、終歸

乏血ノ經過、多クハ緩慢ナリ、或ハ頓カニ萎黄病

ヲ發スル者アリ、又輕微ノ疾患ナルニ、驚駭、情意感動ニ由テ、俄カニ大病トナル者アリ、醫藥ヲ用テ多クハ治スヘシ、能ク危險ニ傾ク者ヲ救ヒ、又能ク死狀ヲ具スルノ顔貌ヲ變シテ、美麗ノ容色ヲ得セシムヘシ、其復治スルヤ、徐〻ニメ顯著ナル變移ナシ、是レ血液ノ量、及ヒ質、漸次ニ平態ニ復スルカ故ナリ、食欲、顔色平ニ復シ、體温常ニ囘リ、怠惰ノ者活潑ヲ得ルハ、是レ治愈スルノ確徴ナリ、經行順調ヲ得ルヿアルモ、血液製造佳適ヲ得ルノ徴アルニ非サレハ、未タ以テ治愈ヲ期スル能ハス、萎黄病ノ經過、數月、數年ニ及フヿアリ、治愈ニ進ムノ間ニ、復タ其歩ヲ停ムルヿ屢之アリ、治ヲ施コスハ、温暖ノ時期ヲ最佳トス、治愈ノ後モ、殘蘗猶未タ全ク盡ス、春時ニ及テ、怠惰ヲ發シ、又復發數囘ニ及フヿアリ、或ハ神經機能ノ失宜、感覺過敏、神經痛、子宮病、神思鬱憂、或ハ心悸動、心藏肥厚、開大等ヲ遺スヿアリ、或ハ萎黄病愈後、一種ノ腹滿ヲ發スル者アリ、

全身乏血ナレハ、敗血ヲ生シ、又諸般ノ全身病局處病ノ素因トナル、又乏血ナレハ、虛性熱、腐

敗熱、間歇熱、神經病、水腫、敗血、虛性失血ヲ發シ易シ、局部症ハ寒壞疽、軟解ナリ、

預後

原因、病性、合併病ニ隨テ、之ヲ定ムヘシ、根治法ヲ施コシ、攝生ヲ適宜ナラシムルヿヲ得ル者ハ、大ニ佳ナリ、總テ已ニ經行アルノ婦人ニ發スル乏血ハ、未タ經行ヲ見サルノ少女ニ於ケルヨリハ更ニ頑固ナリ、諸症ノ劇甚ナルヨリハ經過ノ緩慢ナルヲ恐ルヘシトス、抑モ萎黄病ニ於テ、最モ危險ナルノ症ハ、病間發スル所ノ心病ト、胃病トナリ、肺藏結節ヲ生スル亦恐ルヘシ、萎黄病者、瘦削、咳嗽スル者ハ、精密ニ診察スヘシ、萎黄病者ニハ交接ヲ行ハシメ、妊孕スレハ治スト、是レ往時ヨリ世普ク唱フル所ナレ𪜈、妊娠中ハ、血體大ニ減少スルヲ見テ、以テ其非ヲ悟ルヘシ、

鑒別

滲淡色黄疸、脾病、黴毒、及ヒ他ノ敗血病内部腐敗溶崩ト混シ易シ、心悸動有形性心病ト混シ易シ、膨腫真ノ水腫ト混シ易シ、神經諸症、胃機失宜等他病ト混シ易キヲ以テ、之ヲ鑒別スルヿ易カラ

ス、此病ヲ辨別スヘキノ事件、今其最要ナル者ヲ掲ク、

萎黄病ノ皮色、黄疸ニ似タレ𪜈、眼ノ白膜ハ、必ス真珠色ナリ、黄疸ハ先ツ眼中ノ色ヲ變ス、又黄疸ニハ、心悸動ナク、静脈音ナシ、且ツ尿色黄濁、大便黄色ヲ失ス、以テ之ヲ辨スヘシ、

脾病ノ皮色多クハ蒼ニ近シ、但シ血質ヲ損シ、血體ヲ減スルヿ甚シケレハ、大ニ疑似ノ者アレ𪜈、脾部顯シク腫起スルヲ以テ、之ヲ知ルヘシ、又黴毒ハ、必ス局部症アルヲ以テ、之ヲ辨スヘシ、

心悸動ト心藏器械病ト、辨別スルヿ極テ難シ、是レ心病常ニ悸動ヲ起シ、又譫妄、膨腫、皮色汚穢ヲ兼發スレハナリ、且ツ萎黄病、終ニ心藏病ヲ起シ、又其相合併スル者アルヲ以テ、其已ニ心病ヲ起セルヤ否ヤヲ決スルヿ、殆ント能ハス、但シ之ヲ辨別スルニハ、次ノ諸件ヲ以テス、

萎黄病心悸動	器械性心病
情慾發動ノ時、婦人ニ於ケル、是鑒別ノ一要件ナリ、	

心悸動ヲ發スル他症ト	心藏諸患症ヲ發スルハ、
併セ起ル、悸動頓カニ起リ、又忽チ止ム、全然休歇ノ時アリ、身體運動情意感動ノ後、經行来ラントスルトキ、最モ甚タシク、諸症減退スレハ、復タ隨テ鎮靜ス、鼓動增多ナレ𪜈、音弱シ靜脈音アリ、	皮色變スルノ前ニアリ」、諸症間歇スルヿナク、常ニ持續ス、心動音アリ、必ス强シ、心ノ機能常ニ亢起スルカ故ニ、心部ノ波動亦著シ、之ヲ敲クニ鈍音アリ、
刺戟劑、鐵劑、能ク之ヲ鎮靜ス、	刺戟劑ヲ用フレハ、必ス增惡ス、
面色滲淡ナレ𪜈、屍色ナシ、	滲淡色全面ニ及ハス、頰脣大ニ屍色アリ、

然レ𪜈此二病ヲ辨別スルヿ、或ハ極テ難キ者アリテ、萎黄病ヲ誤リ認テ、心病ト爲ス者少ナカラス、其誤リ易キハ、心藏ノ動脈口ニ音アルト、又之ヲ探ルニ、心藏大トナル者是ナリ、甲症ハ萎黄病ニ於テ、心藏有形因ナキモ之ヲ發スルヿアリ、又

强ク鈍音ヲ發スルハ、心藏開大スルニ由ルヿアリ、是レ血液減少シ、心藏ノ筋質彈力ヲ脱シ、輸送スル所ノ血液ニ抵抗スルノ力足ラサル所ナリ、

余嘗テ此ノ如キ患者二人ヲ療ス、共ニ鐵劑ヲ連用シテ、其鈍音ヲ鎮靜シ、平全ニ復スルヿヲ得タリ、

萎黄病者ノ膨腫ハ、其未タ水腫ニ陷ラサル者ニ於テハ、唯宵間ノミニ乄、夜中ハ消散ス朝ニ眼瞼、面部大ニ腫起ス、又尿ヲ撿スルニ、卵白質大ニ減ス、是レ一大要件ナリ、

治法

根治法ヲ施コスニハ、外貌症候ヲ精密ニ探索シ、凡ソ病ヲ起ス所以、又之ヲ保持スル所以ノ諸件ヲ退クヘシ、消耗性ノ排泄、出血、粘液漏泄等、其能ク為シ得ヘキ者ハ、之ヲ閉止スヘシ、血液製造諸器ノ失宜、例之消化力失常ハ、其定法ニ随テ、之ヲ處置スヘシ、若シ夫レ地方ノ性、一時雰圍氣ノ質、病因トナル者ハ、患者ノ景況ニ随テ、之ヲ避ケシムヘシ、情慾發動ノ期ニ於テ發スル乏血萎黄病ハ、生殖機能ニ注目シテ、之カ治ヲ處スヘシ、其機

能失冝竊ヵニ遠因トナル者アリ、總テ情慾ヲ挑發スル所以ノ諸件ハ、皆之ヲ避クヘシ、起熱性ノ飮食、戀愛ノ情ヲ起ス所以ノ事件、情意感動、稗史ヲ讀ミ、戯場ヲ觀ル、安逸閑居、柔軟ナル毛褥ニ卧ス、是レ啻ニ閉塞ヲ起スノミナラス、更ニ衰弱ヲ保持シ、生殖機器ニ害アリ、長眠亦然リ、戀情達スルヿ能ハス、沉欝憂傷スル者ハ、箇斯老翁（依卜加刺的斯氏ノ異稱、）ノ論書ヲ講シ教誨スヘシ、世或ハ妊孕セシムルヲ以テ、萎黄病ヲ治スルノ要法ナリトスレ𪜈、本文記スル所ノ法則ニ據テ、適冝ノ治法ヲ施コシ、血質ヲ復良スルヲ最モ勝レリトス、

養育法正キヲ得テ、徒ニ情意ヲ慰撫シ、安逸ナラシムルヿナク、精神身體ヲ順正ニ使役シ、妄ニ淫情ヲ煽動スルヿナキハ、自ラ萎黄病根治法ト云フヘシ、

乏血、萎黄病ノ直治法ハ、强壯收歛藥是ナリ、最要ノ規則ハ、患者ノ體力ヲ測リテ、收歛品ヲ妄用セス、漸次ニ其量ヲ増多スルナリ、

鐵ハ、萎黄病ヲ治スルノ奇效品ナリ、許多ノ方劑

多クハ之ヲ配ス、ノマン氏ノ古語ヲ至當ナリトス、曰ク欲㆑増㆓多血量㆒、宜㆑増㆓多銭量㆒、アンドラル氏、ガハルレト氏、レモン氏等ハ、萎黄病者ニ鐵劑ヲ用ヒテ、其前後ノ血液ヲ分拆シ、以テ鐵劑ハ血體ノ量ヲ常度ニ復スルヿヲ徴ス、然レモコルネリアニ氏曰ク、是レ服用一二月以後ニ及テ、始テ然ルナリト、

但シ血體ノ増多スルハ、鐵ニ由ル所ニテ、良全ノ食餌ト、乳糜製造ノ多キニ由ラサルヲ證スルカ為ニ、コルネリアニ氏、多量ノ鐵劑ヲ用ヒタル萎黄病者數人ニ、單ニ植物ノミヲ食セシメ、之ヲ試ムルニ、果メ同様ノ變化ヲ見ル、又其肉食ヲ與フル者ニハ、卵白質ト、纖維質増多スルヲ見ル、是レ其脈管系ノ過度ノ刺戟ヲ減節セサレハ、必ス害アルヘキノ狀態ナリ、ストラル氏曰ク、鐵ノ量ハ、食物ヨリ血中ニ賦與スル所ニテ、萎黄病ノ人モ、健康ノ人モ異ナルヿナシ、萎黄病者ノ血中、鐵分少キハ、其因他ニ在リテ、鐵分ヲ賦與スルノ少キニ由ルニ非ス、故ニ萎黄病ハ、器械機能ノ失宜ニ根據シテ、滋養液

ヲ製造シ、適宜ノ成分ヲ血中ニ賦與スルヿ能ハサルヨリ發スル者ナレハ、先ツ其消化力ヲ復治スルニ非サレハ、終ニ本病治ヲ得スト、又之ヲ保證スルニ一例ヲ示ス、鐵劑ヲ連用スルヿ久シク〆効ナシ、乃チ長眠ヲ禁シ、冷水洗法ヲ施コシ、適宜ノ運動、減節ノ食餌ヲ用テ、始テ治スル者アリキ、ユル子ル氏亦此説ヲ唱ス、余亦此類ノ經驗多シト雖、是レ患者固有ノ體質ニ由ル者ニテ、衆患者皆然リト為スヘキニ非サルナリ、

萎黄病者、皆能ク直チニ鐵劑ヲ服シ得ルニ非ス、消化機能健康ナル者ノミ、則舌清潔、便通適宜等、故ニ消化機失宜ナル者ニハ、先ツ適當ノ下劑、大黄、或ハ純苦味藥ヲ配シテ、之ヲ疎滌シ、後始テ鐵劑ニ移ルヘシ、此時尚苦味品ヲ配用ス、又上ニ記スルカ如ク、或ハ膿潰性胃患ヲ具スル者アリ、是レ鐵劑ヲ用フルニハ、最モ注目スヘキ症ニテ、宜ク緩和ノ食物、胃部ニ局處瀉血ヲ施コスヘキ者ナリ、鐵劑ヲ用フルニハ、其最モ消化シ易キ品ヲ撰フヘシ、榠楂加鐵丁幾、鐵亞的兒丁幾、炭酸鐵、酒

石酸鐵、乳酸鐵、天造鐵泉、人造鐵泉、單用シ、或ハ苦味浸劑ニ配用ス、漸次ニ進テ、消化シ難キ强力ノ鐵劑ニ及フナリ、

苦味品ノ以テ鐵劑ヲ用フヘキノ道路ヲ開キ、又以テ之ト配用スヘキ者ハ、括失亞、睡菜、葛兒儒別涅秩加、亞爾蘚、吉那、橙皮、オシアンデル氏最モ之ヲ稱ス、ナリ、又芳香品ヲ配用シテ、以テ其消化ヲ助ク、鐵劑ト芳香品ト配用ノ方例、

安偃斯黜刺皮越幾斯、加密兒列越幾斯各二錢　鐵屑一錢至一錢半　格綸樸根末適宜　毎粒二瓦ノ丸ト為シ、毎服八九至十九、一日三四、ヘクケル氏

亞爾蘚穗三錢　桂皮、鐵屑各二錢　オプト酒三写ニ浸出スルヿ二十四時、濾過シ用フ、一日三食匙、至四食匙、ペレラ氏

括失亞、砂糖各一刄　硇鐵華十瓦　右研和、二十四包トナシ、毎用一包、一日四回、リクテル氏

鐵屑酒二錢　葛爾儒別涅末半写　老利兒末三錢　桂皮末一錢　右調和舐劑トナシ、毎用一二卵匙、一日三四、ステユトガル氏萎黄病舐劑、

鐵劑ヲ用フレハ、便秘スルノ體質アルガ故ニ、

大黄ヲ配用スルヲ最佳トス、方鐵屑（半戔）大黄、桂末（各二氏）砂糖一刄右毎朝夕、一劑ヲ服ス、（ヒユヘランド氏薬方編第二百五号）胃中酸敗液アル者ニハ、鐵劑ニ彼此ノ制酸品ヲ配用ス、方炭酸麻倔涅失亞（二十氏）鐵屑（三氏、至四氏、）桂油糖劑（半刄）毎用一劑、一日三回、（ナウマン氏）

ブラウド氏炭酸鐵用法ハ、世普ク賞用スル所ナリ、其方炭酸鐵、酒石酸鐵（各半号）達刺侃篤趯謨（適宜）右四十八丸トナシ、最初三日間ハ、早朝空心ト、夜臨卧ニ毎用一丸、第四日、第五日、第六日、更ニ日午一丸ヲ用フ、第七日、第八日、第九日ハ、毎朝夕二丸ヲ用フ、第十日、第十一日、第十二日ハ、日午又二丸ヲ用フ、第十三日、第十四日、第十五日ハ、毎朝夕三丸、第十六日以往ハ、毎用四丸、一日四回、此ノ如ク連用シテ、回復ヲ見ルニ至リ、後漸次ニ其量ヲ減少スルヿ、始メ増多スル時ノ法ノ如シ、

ビユクチル氏用法ハ、炭酸曹達、撒兒末爾秩斯（各一氏）又升鐵鹽（二刄）蒸餾水（一号）ニ溶和シ、毎用二十滴、一日三四回、（ラヂウス氏）

沃實涅鐵ハ、ビーロキユイン氏、トムソン氏、マクリユレ氏及ゲドチユングス氏賞用スル所ナリ、但シ尋常ノ症ニ用フヘキニ非ス、唯萎黄病、腺毒合併スル者、列印巴液欝積ヨリ起ル者ニ用フヘシ、

含鐵鑛泉中、有名ノ者ハ、ボクレト」ブリユセナン」スクワルバク」フランセンブリユン」ペールモント」ドリビユルグ」スラベン」カンスタドト」スパー」キユドワ」アルトワセル」フリンスヘルグ」ナリ、皆萎黄病ニ施スヘシ、

ストルル氏ハ、檎酸鐵及鐵屑ノミニテ足レリトス、古人用フルカ如キ大量ハ、ストルル氏一日ノ量、鐵屑二爻ニ至レリ」方今取ラサル所ナリ、是レ其消化スヘカラサルカ故ナリ、コル子リアニ氏ハ、鐵屑一日夜ノ量、四瓦五瓦ニ過キス、然レ𪜈稍多クメ五瓦ヨリ十瓦ニ至ルヘシ、蓋シ一分ハ必ス大便ニ混シ去レハナリ、含鐵泉ヲ以テ、之ヲ證スルニ、飲用スルヿ多シト雖、鐵分ノ體中ニ入ルハ、極テ少ナキ者ナリ、

ヒツテル氏萎黄病ニ鐵劑ヲ用フルノ一經驗

アリ、今之ヲ掲ク、一患者七週間ニ鐵百瓦ヲ服盡ス、而メ血中ニ入ル者、大畧三十二瓦ナリ、是レ其増多スルヲ以テ之ヲ知ル、抑モ血中鐵分ノ比例ハ、健康體ニテハ、百分中六、二ナリ、今此患者ハ百分ノ一、四ヨリ四、六ニ上レリ、則チ毎日用フル所ハ、鐵二瓦、而メ其血中ニ入ル者ハ零六瓦ナリ、是ニ由テ之ヲ觀ルニ、今泉水十六㕝ニ、炭酸鐵零、五アリ、則チ純鐵零、二三六ナリ、之ヲ內外施用シ、兼テ食餌ヲ適良ナラシムレハ、萎黄病ヲ治スヘキヿ固ヨリ疑ナシ、且ツ泉水中含ム所ノ鐵ハ、其配合ニ由テ、消化シ易シ故ニ輕量ヨリ進テ、大量ニ至ルヿヲ得ヘシト、〔余謂ク此説實ニ然リト雖、其檢査法ハ十全ナラス、故ニ信シ難シ、〕

頑固症ニハ、鐵劑內用ニ、兼テ天造或ハ人造鐵水浴法ヲ施ス、鹽酸鐵丁幾劑（一㕝至二㕝）又グロブマルチス、（一㕝至二㕝）又グロブマルチス末（一㕝至二㕝）一浴ノ量トス、

此諸劑ヲ用フルニ方テ、兼テ攝生ヲ適宜ニシ、又適宜ノ食餌ヲ與ヘテ、以テ血液製造ヲ佐クヘシ、清

潔ニメ酸素多キ氣中ニ在ラシム、山居ヲ最佳トス、體力ニ應メ、日〻適度ノ運動ヲ為サシメ、昏暗ナル室内ニハ長居スルヿ勿ラシメ、植物ヨリハ肉類ヲ多ク食セシム、但シ消化力ノ度ヲ測リテ其品ヲ撰フヘシ、佳酒、或ハ微苦ノ麦酒ヲ飲マシム、未熟ノ果實、萵苣、酸性、脂性、鹽藏品、炙肉、茶等ハ、患者ノ嗜ム所ナレ𪜈、嚴ニ之ヲ禁スヘシ、精神ヲ皷舞安慰スルハ、大ニ治法ヲ助ク、是レ遊行入浴ノ效アル所以ナリ、愈後治法ハ、神經質ノ少女ニハ、河水或ハ海水冷浴ヲ施ス、

萎黄病ニ賞用スル諸劑中、最ナル者ハ鐵ナリ、單用シ、又神經藥、殊ニ子宮ヲ衝動スル効アル臭氣ノ脂類、又通經藥ヲ配用ス、（蘆薈、泊芙蘭、薩毘那、瓦爾抜奴謨、没藥等、）其神經藥ヲ配スルハ、神經諸患アリテ、萎黄病ヲ擬スル者ニ、一時快ヲ取ルニ用フ、但シ大量ヲ用フルモ少効ナク、阿魏、數戔、或ハ半写ヲ用ヒテ、少シモ變動ナキ者、葛斯篤僂謨丁幾二三滴ヲ用ヒテ、大ニ神經機能ヲ奮起スルヿアリ、醫宜シク之ヲ知ルヘシ、又鐵ニ通經藥ヲ配用スルハ、畢竟月經閉ヲ認

テ、以テ病原ト為スノ誤慮ニ出ル者ナレハ、余之ヲ取ラス、通經藥ヲ用ヒサルモ可ナル者多ク、又利ヨリハ害アルアリ、血液製造ヲ復治スレハ、通經藥ヲ用フルヿナキモ、經水自ラ來ル、然ルニ妄リニ通經藥ヲ與テ、血質ヲ復セントスルハ、大ニ本旨ヲ失スト云フヘシ、

感覺極テ敏捷、脈管神經機能亢起スル者ニハ、鐵劑ヲ與フルニ精意ナルヘシ、衝動ニ過レハ却テ病勢ヲ險惡ニ進ムルナリ、此時先ツ緩性收斂劑、收斂亞的兒、越栗矢爾赫篤里沃利、或ハ燐酸等ヲ輕量ニ與ヘテ漸ク慣レシムヘシ、又鎮定性神經藥効アリ、鑛水、「エムス」「スクランゲンバド」「レイ子ルス」「ランデク」亦良効アリ、之ニ兼用スヘキハ、微温浴、又誘導法ト芥子泥、乾角法、摩擦法ナリ、此ノ如クスレハ患者能ク鐵劑ヲ堪フル者ナリ、

以上記スル所ハ、萎黄病治法ノ通則ナリ、諸般ノ症アルモ、各〻之ヲ治スルヿヲ要セス、固ト其諸症ハ、血液製造ノ失宜ニ由ル者ナレハ、其原復治スレハ、皆隨テ除クヘシ、然レ𪜈、一局部機能失宜

アリテ萎黄病ト併セ發スル所ニシテ、衝動劑ヲ要スル者アリ、是レ吐劑、下劑、皮膚、神經、筋ヲ刺戟スル品等ノ偉効アル所以ナリ、吐劑ヲ用フルニ由テ、從来麻痱セル部、其機能ヲ奮起シ、是ニ於テ收斂劑、始テ其效ヲ奏シ、全治ヲ得ルヿアリ、衝動劑ヲ用フルニハ、衰弱ヲ遺サヽル品ヲ撰フヘシ、例之吐劑ニハ吐根、下劑ニハ大黄、蘆薈、スタル氏泄利丸ノ如シ、マルカルレ、ハルル氏ハ、蓖麻油一兮ヲ與テ、以テ腸ヲ疎滌シ、後蘆薈、硫酸鐵各二氏ノ丸ヲ、一日二回、食時ニ用フ、奇効アリトス、皮膚刺戟ハ、揮發芳香洗劑、鐵浴、撫摩等ナリ、血液製造ノ機、常ニ復シ、月經通利スルニ至レハ、凡ソ之ヲ障止スル所以ノ諸件ヲ避ケ、患者此時限間ハ、蓐ニ就テ温養ス、經行十分ナラサル者ハ、撫擦法ヲ施コシ、内胯ニ乾角ヲ貼シ、腹部ニ芳香藥品ノ蒸溻法、芥子泥ヲ貼シ之ヲ促スヘシ、尚數月ノ間、此ノ如ク注意スルヿヲ怠ルヿ勿レ、フラ子ル製ノ襯衣ヲ著スヘシ、更ニ輕量ノ鐵劑ヲ服シ、休歇シテ復タ之ヲ用フ、此ノ如クニメ、諸症全ク除キ、治法局ヲ終フニ至ル、諸症再發スル者ハ、

鐵劑ヲ與フルヿ、前ノ法ノ如シ、

記スル所諸法ハ、萎黄病諸種ノ症ニ用フヘキ者ナレハ、醫之ヲ領解スレハ、治ヲ處スルニ難キヿナシ、此他妙効品ト稱スル者少ナカラサレ𪜈、今之ヲ枚擧スルヲ要ナシトス、但シ二品ヲ説クヘシ、則チ滿俺ト、寒水灌法是ナリ、

滿俺ハ、往時カウスク氏、グレラ氏、セントマ氏賞用スル所ニテ、近時ニ及テ、ハンノン氏最モ大ニ之ヲ賞揚ス、而メ萎黄病者ノ血ヲ分析シテ撿査シテ曰ク、或ハ鐵量ハ平全ノ如クニメ、滿俺ノ量減少スル者アリト、且ツ此二症ノ狀態ヲ詳説ス、血中滿俺減少スル者ハ、其症萎黄病ト大ニ相似タリ、唯皮色平ノ如ク、爽活、腰部疼痛、下肢疼痛、諸般ノ神經症、偏頭痛、不眠、神思沉欝、心悸動、經閉等ナリ、ハンノン氏此症ニハ硫酸滿俺、鹽酸滿俺四分瓦ノ一、一瓦ニ至ル、或ハ更ニ多クス、萎黄病重症ニ於テ、血中ノ鐵分、滿俺共ニ減少スル者ニハ、滿俺ト硫酸鐵トヲ配用ス、又間歇熱後ノ萎黄病、粘液漏泄過多、及ヒ他ノ慢性病ニ、滿俺ヲ用ヒテ良効アリ、ペト

レキユイン氏、亦満俺ヲ試用スレ𪜈、必ス多量ノ鐵ヲ配用セシカ故ニ、其經驗スル所、適切ナラス、ハンノン氏又曰ク、鉛、銅、毘斯密篤ハ能ク萎黄病ヲ治スルヿ、鐵及ヒ満俺ノ如シト、フレユレイ氏ハ、萎黄病及ヒ乏血ニ、寒灌水法ヲ賞用ス、以テ細脈管ノ機能ヲ奮起シ、血質ヲ復良シ、温暖ヲ起シ、滋養補給ヲ盛ニス、

〔ハンノン氏曰ク、尋常ノ食物中ニハ必ス鐵及ヒ満俺アリテ、以テ血中費耗スルノ此二成分ヲ補給ス、然レ𪜈消化スルノ時ニ方テ、腸中ニ硫水素氣ヲ發生スレハ、則チ鐵及ヒ満俺ノ集合ヲ分拆シ、溶化セサルノ性トナス、是ニ於テ血中此二成分鈌乏スルナリ、是レ萎黄病ニ於テ見ル所ニテ、此病ハ腸中硫水素氣ヲ發生スルヿ多キ者ナリ、此分拆ヲ防クニハ、無害ノ鑛屬、能ク硫水素氣ヲ吸收シ、又之ト合シテ溶化セサル硫黄集合ヲ為ス者ヲ用フヘシ、此性ヲ具有スル品ハ、毘斯密篤、鉛及ヒ銅ナリ、鐵及ヒ満俺亦然リ、〕

附言

今茲ニ記スヘキノ一病アリ、是レ近世始テ衆醫注目スル所ニノ、一種ノ合併症ナリ、則チ腺腫、眼球腫、及心藏病ノ合併症ナリ、余此類ノ症ヲ診スル六人、又他人驗スル所二十一人アリ、今記スル所、此經驗ニ據ルナリ、

其症始メ必ス心病ノ兆候ヲ發シ、悸動甚タシク、努力シテ運動スルノ後、最モ甚タシク、短息、煩悶ヲ兼ヌ、數日ニノ甲狀腺腫脹シ、兩眼一種ノ光彩アリテ、漸次ニ腫起シテ、窩外ニ突出ス、此諸症一齊ニ并ヒ發ス、諸症逐次ニ增進スルカ故ニ、患者醫治ヲ請フニ至ル、殊ニ眼球突出シテ、大ニ外貌ヲ醜ニスルヲ以テ、夙ニ治ヲ求ムル者アリ、之ヲ診スルニ諸症左ノ如シ、

眼瞼大ニ弛縱スルカ故ニ、眼球非常ニ大ナルカ如シ、是レ此病ノ初起ヲ誤リ認テ、眼球水腫トナス者アル所以ナリ、眼瞼大ニ隆起シ、眼球突出シ、稍眼瞼ヲ壓セハ、容易ニ窩内ニ沉沒スレ𪜈、指ヲ放テハ、復タ忽チ彈出ス、是ニ於テ大ニ顏貌ヲ變ス、而ノ視力ハ妨クル所ナシ、或ハ稀ニハ近視

ナルアリ、瞳子散大スルアリ、甲狀腺稍微響アリ、頸動脈ノ皷動ニ應シテ煽動ス、但シ全部ニ於テスルアリ、一部ニアルアリ、右側ニ於テスルヲ最モ多シトス、耳ニテ聽クニ數般ノ音アリ、患者兼テ心悸動ヲ惱ミ、體動、神勞ニハ必ス增進ス、而メ心藏器質ニ於テ疾患アルヲ見ス、心ノ搏動スルカ、大ニノ廣シ、且ツ疾數ナリ、「一分時間、百二十動、百三十動ニ至ル、」心藏大動脈共ニ音アリ、之ヲ敲キ試ムルニ、心藏ノ周圍增大ヲ見ルヿ甚タ稀ナリ、此三種ノ症、合併スルノ患者少ナカラス、然レ𪜈、或ハ眼腫、或ハ腺腫ノ一症ヲ缺ク者アレ𪜈、心病ハ必ス發見スルノ症ナリ、又記スヘキアリ、夫レ甲狀腺腫ト、眼球突出トハ、輕重一樣ナラサル者多ケレ𪜈、必ス心動ノ劇易ニ應シテ、增減進退スルナリ、

之ヲ病ム者、多クハ婦人ニメ、必ス萎黄病ノ兆候ヲ發ス、皮膚及ヒ粘液膜、滲淡色、靜脈音アリ、異嗜、譫妄頭痛、耳鳴、眩暈、卒倒、月經不順、血色淡白、白帶下、經閉、又或ハ兼テ子宮病症、梅核氣、四肢厥冷、神經疼痛、神思鬱憂ス、バセドウ氏ハ、精神活潑ナル

者アリトスレ𪜈、此症極テ少ナリ、或ハ萎黄病ノ症ナク、以テ此病ハ萎黄病ニハ拘ハラサル者ノ如ク思ハル者アレ𪜈、是亦極テ少ナリ、

經過ハ緩慢ニ〆、數月、數年ニ及ヒ、増減發歇スルアリ、間歇熱ニ罹ルヿアレハ、殊ニ増悪ス、

預後ハ、器械性病ノ有無ニ順テ異ナリ、其有形性ノ者ハ、終ニ根治スルヿ能ハス、唯萎黄病症ヲ治シテ、以テ困難ナル症ヲ緩解スルノミ、又心藏ノ有形因ナキ者ハ、假令其症甚シキ者ナル𪜈、適宜ノ治法ヲ施セハ、漸次ニ快路ニ向ヒ、遂ニ全愈ヲ得ルナリ、

原因知ル可ラサル者アリ、乏血ノ症アル者ハ、其因、脱血、下利、子宮出血、白帶下、哺乳過久、胃血、腸血等ニ在リト知ルヘシ、或ハ精神沈鬱ヨリ之ヲ誘起スル者、亦少ナカラス、

從来解剖シテ驗スル所ハ、心藏弛縦、肥大、障膜一部肥厚トナリ、其作用ヲ失シ、甲狀腺汚液窖敷シ、水液充盈シ、眼窩ノ底面ニ、脂肪欝畜シ、以テ眼球ヲ突出セシムルノ原タルアリ、ヘウシンゲル氏驗スル所、一患者、肝藏脂肪多ク、兼テ脾藏増大ス、

原病性解剖ニテ未タ其理ヲ詳カニセサル者アリ、〔一〕此三症、何ノ故ニ常ニ相合併スルヤ、〔二〕腺腫、眼腫、何ノ故ニ心動ノ多寡ニ應シテ増減スルヤ、恐ラクハ心悸動スル𬼀、上行大静脈、又其枝末ニ静脈血鬱積スルニ因ルナルヘシ、此三症、必ス偶然ニ合併スルニ非ス、内景必ス之ヲ結連スル所以ノ者アルヘシ、然レ𪜈未タ之ヲ詳カニセサルノミ、治法ハ後件ヲ知ルヘシ、多クハ萎黄病症ヲ發スルヲ以テ、之ヲ治スルヲ標準トス、而メ必シモ有形性因ノ有無ニ拘ルヿナシ、最モ鐵劑ヲ佳トス、症ニ隨テ大黄、蘆薈等ヲ配用ス、連用持久シテ、數年ニ至ルヘキヿアリ、兼テ滋養性ノ食物、田野ノ空氣、含鐵鑛泉、之ヲ要スルニ、萎黄病治法ニ依ル、人或ハ沃實湼、殊ニ沃度加里、或ハアデルヘイド鑛泉ヲ賞用スルアリ、余驗スル所ノ二人、萎黄病症ナキ者ニ、心藏ノ動機ヲ鎮静スルニ、鑛酸、實芰答利私、醋ヲ用ヒテ、良効ヲ得タリ、

更ニ血液調和失宜スルノ疾患アリ、其本病、脾病、

静脈病、肝藏病篇ニ於テ説クヲ至當ナリトス、故ニ次テ血液循環諸病ヲ論スヘシ、

侃斯達篤巻之一　終